に於いて地方地主が國郡司の支配下より中央貴族との結合へ體制の轉換を行つたものであり、この新關係を律令法の根據により合法化せんとする苦心が、從來の起源說となつて表面化したのであることを論ぜられた。兩制の親近關係を示す例を多く紹介されてゐるなかにも、平安初期既に政府官衙に屬する莊の存在を說かれるなどは最適例と云ふべきであらう。「第三莊園の不輸不入性について」に於いては、最近藤間氏が初期莊園が地方豪族の奴婢使役に於いて成立したことを主張し、奴婢が不課口であつた所から不輸性が來たのであると說明されたに對し、その矛盾をするどく突かれ、不輸不入に就いては莊民の免と莊園領主の爲の免の二面の區別に注意すべきであるとし、莊民の免は土地所有の權の莊園領主の免は土地領有の權の發達に結びつけて考へるべく、前者は園宅に後者は莊家に根源を求むべきを提唱された。「第四宅地の「戶主」について」に於いては、都城が營まれそこに宅地が創められたとき、その宅地の測量上の單位として「戶主」のあることを紹介されつゝ、都會生活に於いては大家族の一戶內に於ける共同生活が無意味であり、早く單一家族單位の生活に分化したことを考へられ、更に中世都市生活には農村的要素の多く認められる事實を說明され、最後に「戶田」についても言及せられるところがあつた。「第五奈良時代の村」に於いては、當時の村落生活が鄕戶を中心とする血緣による結合から成つてゐたものゝみでなく、史料的には自然村落である村落體の地緣による結合が考へられねばならず、むしろ後者が根强く存續してやがて室町時代の鄕村制の中に再びその姿を現してくると結ばれた。「第六國衙領と武士」の一篇のみはすでに本誌上に發表せられたものである。

全六篇が廣い範圍にわたる史料蒐集と極めて正確なる解釋の上に立ち、その行文至るところ含蓄ある論考であるのに、いま限られた紙面に單なる梗概を記述したのであつては、到底本書の全貌を充分に盡しがたい。併したゞこの拙き紹介によつても、本書が如何に多くの卓越せる意見を含んでゐるか、概ね推察せられうるかと思ふ。著者は先般名譽ある召集を受け勇躍皇軍の第一線に立たれたが、私は武運の長久を深く念ずると共に、銃後に遺されたこの上なき貴重を、こゝに更めて謝したいと思ふ。(A5版・假綴一六一頁・伊藤書店刊・定價壹圓六拾錢)(林屋辰三郎)

ルネサンス文化の潮流　大類伸著

近代の超克といふことが論議される樣になつてからルネサンスに關しても種々なる見解が述べられて來た。それは西洋近代精神を問題とした場合その出發點となつたルネサンスの本質が重要な問題となつて來るからである。かやうにルネサンスの性質探究が識者の多大の注目を引いてゐる折柄上梓されたのが本書である。本書は次の如き諸論文より成つてゐる。「ルネサンスの人間觀」「ルネサンスからバロックへ」「ルネサンスへの反省」「日本のルネサンス—桃山時代」餘錄バロック美術論抄五篇である。卽ち、本書に於ける著者の主題はルネサンスと共にバロックである。以下筆者は本書に於て特に興味を引かれた二三の點について述べて見たい

と思ふ。

第一にはルネサンスの人間觀についてゞある。これについての著者の見解に於て注目すべきは次の點である。なるほどルネサンスは中世を打破した運動であるが、それは反中世的であるといふのではない。ルネサンス人も決してあらゆる點に於て反中世的であるのではなく、むしろ中世と近世との調和、神と人との握手を求めた點で人間的であつたと云つてよいと。かゝる見解はルネサンスを過渡期として把握せんとする近時の動向より云へば當然主張さるべき點であつて、一般の人々のルネサンスの人間觀がその點未だあまりにその近代的性格を強調しすぎてをり、又昨今の如く近代の超克が叫ばれると、勢ひルネサンスが近代的誤謬の根源として斷罪される傾向の強い折柄、筆者は多くの人々が大類博士の如上の見解をもつとよく玩味して過渡期としてのルネサンスの特殊な精神構造を理解しなければならないと思ふのである。

第二にはバロックについてゞある。卽ち、著者はルネサンスとバロックとは一つの連續であると共に、同時に又相對立した矛盾である。我等は所謂ルネサンスの高邁な精神に憧れながらバロックの露骨な趣味を斥けるに傾くが、其の排擊さるべきものこそ實は又近代西洋なるものゝ本質であることを忘れてはならないとされる。著者が史家としてバロックの何か騷々しい露骨な誇張された趣味を排斥することなく、その中にかへつて西洋文化の一つの姿を見るべき事を强調してをられる事は興味深いことである。特に著者はルーベンスの繪畫の意義についてすぐれた見解を示してをられる。

第三に注目すべきはルネサンスについての反省である。ルネサンス研究の權威たる著者がルネサンスの歷史的意義の偉大さを認めると共に、又徒らにこれに心醉することは避けねばならぬとして否定の立場からルネサンスへの考察をなされてゐることは、先にも述べたごとき近代精神の超克といふ近時の論點に對する著者の鋭い感受性を示してゐる。然しながら、著者のルネサンスへの反省は近代的誤謬の根源としてこれを斷罪せんとする態度ではなく、むしろ從來あまりに近代的解釋のもとになされてゐたルネサンス觀そのものを修正するための反省である。したがつて著者の反省によつてかへつてルネサンスの新しい意義を見出し得るのである。卽ち、シュレーゲルの近代史批判にしても啓蒙期以後の近世になり切つた時代――著者の所謂第二のルネサンス――に對してゞあつて、中世的なものを多分に含む過渡期としての第一のルネサンスをば斥けてゐないと云はれるのは興味深い所である。著者のルネサンスへの反省は從來のルネサンス觀への反省であつてそれによつてルネサンスの新しい意義を見出そうとされる努力である。その點で近代的誤謬の根據としてルネサンスを解釋せんとする人々のルネサンスへの反省とは意味を異にしてゐると思ふ。

以上の外に著者が日本に於けるルネサンスと考へられる桃山時代についてこれをヨーロッパのルネサンスと比較研究せる論文があり、最後にはバロックに關する五つの論文の要旨を收めてある。この論文抄錄は選ばれた論文がいづれも重要なものだけに決

して餘錄として輕んずることの出來ないものである。

要するに本書はルネサンス及びバロックに關してすぐれた見解に富むものであつて、多くの人々の熟讀玩味をすゝめたい。

（文藝春秋社　定價四圓）（鹽見高年）

都市國家と經濟

ハーゼブレック著
原隨園、市川文藏譯

我國が直面する現實の事態は、皮相な表面的觀察を以て足れりとせぬ限り、ヨーロッパの實體の誤りない把握こそ我々にとつて喫緊の要務たる事を示して餘りあるのであるが、ヨーロッパ文化の濫觴が正にギリシヤ世界にあり、ギリシヤ精神こそヨーロッパを動かす原動力を形作るものであるからには、現下、ギリシヤ的存在の正しい理解が、單なる學的領域を越えて廣く一般に要望されるのを見るは、蓋し當然と言ふ可きである。此の秋に當り、古代經濟史家として令名高き Hasebröck 教授の „Staat und Handel im alten Griechenland" 1928 が、本邦ギリシヤ史學の至寶たる原先生の手により、市川文學士協力の下に、こゝに其の彫琢の譯業成り、史學叢書の一として公けにされるに到つたのは、唯に學界を裨益するに止まらず、一般人士に親しく此の名著に接する機會の與へられたるを思ひ、誠に喜ばしい限りと言はねばならぬ。

抑〻古代經濟史研究の中心問題が古代における資本主義經濟の問題である事は、こゝに改めて說くを要せぬ。古代資本主義問題の最初の提出者たるカール・ビュッヒャー、ウィルヘルム・ロッシャー一派の國民經濟學者は、其の經濟發展段階理論に基き古代世界に封鎖的家內經濟なるレッテルを張り、何等怪む所なかつたのであるが、これに對し、其の抽象性を指摘し歷史家としての立場より古代ギリシヤ世界に既に資本主義經濟の發展せるを主張したのが、古代史家エドワード・マイヤーであり、ギリシヤ世界に近代的資本主義經濟社會を認める點においてベールマンも亦マイヤーと同類である。ビュッヒャー一派の所論が、歷史的事實を無視した抽象性の故に、今日では既に過去の遺物に屬する事は周知の如くであるが、マイヤー、ベールマン等の主張も亦、古代社會の現象を近代的概念を以て測らんとする傾向著しく、これ亦非歷史的たるの誹りを免れぬ。こゝに、近代化的解釋態度を排し、具體的な事實の探究に立脚し、以てギリシヤ經濟狀態の眞相を明かにせんとしたのがハーゼブレック教授である。

教授は本書を、第一篇商人、第二篇ヘレニズム時代以前の貿易、第三篇國家と貿易、の三篇に分ち、其の各篇において詳細緻密な實證的研究を基に、ギリシヤ經濟が決して近代的な意味での資本主義經濟に達して居らず、ギリシヤ商業は寧ろ無資本的商業であり、商業の目的も企業的であるより家計的である事を明かにした。彼は、ギリシヤ經濟に高度の發展段階を認めんとする主張は、歷史的過去を評價するに現在的基準を以てする非歷史的態度であると難じ、過去の事象は過去そのものゝ基準を以て測る可しとの歷史的態度の重要性を强調した。しかも彼は、これを理論によつて說かず、歷史探究の過程そのものにおいて身自ら範を示したの